

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No.25 (May 2013)

日本ギaskell協会ニューズレター

‘The appeal of Elizabeth Gaskell: a personal view’

Shirley Foster

First of all, I should like to introduce myself to the Gaskell Society of Japan. I am honoured to have been chosen as the President of a Society that has members from all over the world, showing how much enthusiasm there is for this great Victorian writer. Gaskell studies have grown hugely in the last few decades: unlike Dickens and the Brontës, whose popularity has never really waned, Gaskell was relatively neglected, critically speaking, until the mid twentieth century. The publication of the Knutsford edition of her works by A.W. Ward in 1906, closely followed by the World’s Classics edition of 1906-19, made her writings more easily available, but it was not until later in the century that her novels and stories, as well as her life, began to receive closer and more careful attention, given particular impetus by A.B. Hopkins’s *Elizabeth Gaskell* (1952). Latterly, of course, there has been no shortage of interest in her and her works, as is attested to not only by the splendid Pickering and Chatto complete works (2006), but also by the reissue of the Chapple and Pollard edition of her *Letters* (1966) in 1997 and the *Further Letters* in 2000. In addition, the wide-ranging recent studies, examining her work from a variety of critical angles – biographical, bibliographical, feminist, new historicist, to name but a few – show her established place in the Victorian literary canon.

I hardly need to argue to you, as keen readers of her books, why Gaskell well deserves this revival and growth of attention. I would like, however, to indicate why I personally am drawn to her, and why I feel that she has so much to offer as a writer. When I was writing my first book (on the treatment of unmarried women in Victorian female fiction), I immediately recognised what a wealth of material Gaskell had to offer me. Not only do her texts contain a wide range of female characters from across the social classes and active in a considerable variety of roles, but her treatment of these women shows her deep sympathy with and understanding of her own sex. There are autobiographical influences here: her maternal grief over the death of her son, the lack of a constant father-figure in her life, and her recognition of the complexities of marital relationships all provide recurring themes and tropes in her writing. But I think that in addition to this she has the capacity to visualise and explore female emotions and experiences different from her own, and to bring them vividly before the reader. Her especial strength seems to me to lie in her ability to portray feelings of loss, disappointment and emotional deprivation, as, for example, Margaret Hale’s sense of isolation after the death of both her parents, Phillis’s desolation on learning that Holdsworth has married someone else, Hester Rose’s unrequited love for Philip, and the loneliness and unfulfilment of the heroines of ‘Martha Preston’ and ‘Half a Lifetime Ago’. Gaskell is particularly notable in her picturing of unhappy marriages: her treatment of the mutually tormenting relationship between Sylvia and Philip in *Sylvia’s Lovers* is, I consider, equal to George Eliot’s depictions of fatally incompatible marital unions.

Gaskell is, however, not just a ‘woman’s writer’ whose focus is exclusively on female issues. It is the range of topics that she treats that makes her such a significant writer. At a time when many subjects were contentious, especially for women to discuss, she offers us fictions about dreadful poverty and troubled labour relations, about sexual double standards, and about physical violence. In her short stories especially, she explores areas far from the world of small town society pictured in *Cranford* (which, marvellous though it is, still remains the book which ‘marks’

her as a particular kind of writer). Working almost exclusively within the genre of nineteenth-century realism, she presents her material in an often startling way – the reference to the bloody corpse in ‘The Squire’s Story’ or the thrilling suspense in ‘The Grey Woman’, for instance. At the same time, her ability to render physical surroundings, whether they be the appalling conditions of the Manchester slums or the beautiful seascape at Whitby, is outstanding. There are sides to Gaskell’s writing, too, that have tended to be neglected in favour of her better-known works. More attention has rightly been given recently to her *The Life of Charlotte Brontë*, the earliest biography of this famous novelist and a fascinating text in its own right. Her essays and what could loosely be termed her travel writing are also parts of her oeuvre that well deserve further consideration: ‘French Life’ gives a most evocative portrait of her trip to Normandy in search of material on Madame de Sévigné; in other short pieces she shows interest in Italian politics, French customs, and sheep-farming in the Lake District.

Other readers will of course have other reasons for their admiration of Gaskell’s works – those above merely give my particular opinion. But I know that we all share our love for this writer, and I hope that in Japan you will continue to enjoy reading, discussing and writing about her, as you have done in the past.

◆◆◆ 新刊紹介 (2012 年度) ◆◆◆ (掲載情報は 2013 年 3 月末日までに報告されたものである。)

大田美和「エリザベス・ギaskellの『北と南』をクリアする」『愛の技法——クリア・リーディングとは何か』(中央大学出版部)

大野龍浩「ジェイン・オースティンとエリザベス・ギaskell—道徳と信仰—」『あらすじで読むジェイン・オースティンの小説』

(大阪教育図書), *The Life of Elizabeth Gaskell in Photographs* (Osaka Kyoiku Toshō)

小田夕香理「ジェイン・オースティンとブロンテ姉妹」『あらすじで読むジェイン・オースティンの小説』(大阪教育図書)

小池滋(共編)『ディケンズ朗読短篇選集(II)』(開文社)

玉井史絵(共訳)ルーシー・ワースリー『暮らしのイギリス史——王侯から庶民まで』(NTT出版)

東郷秀光『出逢いと歳月と』(本の泉社)

松岡光治(編訳)『ヴィクトリア朝幽霊物語(短篇集)』(アティーナ・プレス)

松岡光治(編)『ディケンズ文学における暴力とその変奏——生誕二百年記念』(大阪教育図書)

松村昌家(編)『日本とヴィクトリア朝英国——交流のかたち』(大阪教育図書)

松本三枝子『闘うヴィクトリア朝女性作家たち——エリオット、マーティノー、オリファント』(彩流社)

第 24 回例会レポート

日 時：2012 年 6 月 2 日(土) 午後 2 時より

会 場：日本大学法学部本館 2 階第 1 会議室

総合司会：足立万壽子

(ノートルダム清心女子大学非常勤講師)

開会の辞：日本ギaskell協会会長 多比羅真理子

(実践女子大学非常勤講師)

研究発表：司会 閑田朋子(日本大学准教授)

1. 研究発表

「ヴィクトリア朝とアナ・バーボルド——

『メアリ・バートン』を中心に」

太田裕子(聖心女子大学非常勤講師)

2. 特別研究発表「“Lizzie Leigh”——「放蕩娘」の挫折」波多野葉子(元筑波学院大学教授)

講演：司会 松村豊子(江戸川大学教授)

「マンチェスター美術名宝博覧会とギaskell」松村昌家(大手前大学名誉教授)

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩(熊本大学教授)



(撮影：大野龍浩)

2012年6月2日（土）、第24回例会は多比羅眞理子会長の「開会の辞」により開会した。続いて太田裕子氏による研究発表、研究会（読書会）の成果を反映した波多野葉子氏による特別研究発表が閑田朋子氏の司会によって、また、松村昌家氏による講演が松村豊子氏の司会によって行なわれた。

研究発表

1. 「ヴィクトリア朝とアナ・バーボルド ——『メアリ・バートン』を中心に」

太田氏は、アナ・バーボルド（1743-1825）が三つ（教育、家庭、社会）の事象に関心を抱いていたことを指摘し、それらがギaskellの『メアリ・バートン』（1848）ではどのように扱われているかを例示した後、ロマン派の作家バーボルドの文学的、思想的要素が『メアリ・バートン』へ及ぼす影響の可能性について、ユニテリアンの宗教観も考慮に入れて論じた。その際太田氏は、バーボルドの特定の一作品でなく『子どもへの教え』（1778-79）や「社会的地位の不均等への考察」（1807）など発表時期にかなりの間のある複数の作品から引用し、さらに時代の異なるギaskellへの影響を探るという方法を採用しての考察であった。こういう手法での論旨展開には十分な慎重さが要求されるが、困難なテーマに挑戦した意欲的な発表であった。

2. 「“Lizzie Leigh”——「放蕩娘」の挫折」

波多野氏は、“Lizzie Leigh”において「放蕩息子」が堕ちた娘に対する赦しのモチーフとしてしばしば言及されているにもかかわらず、リジーには完全な赦しを与えられないことに注目し、なぜギaskellの「放蕩娘」のメッセージが中途半端になったのかについて考察した。その際に波多野氏は、豊富な歴史的・統計的文献を駆使して、農村部における婚外子やその母親に関する実態と、文学上の様々な作品における「堕ちた女性」のイメージの両方に言及し、その間に見られるギャップを詳らかにした上で、ユニテリアンの「赦し」の精神をもって「堕ちた女性」の救済に力を注いだギaskellが、女性には厳しい性道徳観を科した時代の制約の中で、自身の性に関する見解や世間への中庸の姿勢などによって、心が揺れ動いた結果であろうと結論づけた。

いずれの発表に対しても、フロアとの間で活発な質疑応答が行われ、テーマの根幹にかかわる鋭い質問や温かな示唆に富むコメントが寄せられた。

講演：「マンチェスター美術名宝博覧会とギaskell」

松村氏はまず、長年にわたるヴィクトリア朝文化研究をもとに、貴重な文献資料を活用しながら、1857年にマンチェスターで開催された美術名宝博覧会の社会的な意義深さについて語った。松村氏によると、1851年にロンドンで、1855年にパリで開催された両万国博覧会との関連から、パリの博覧会と比較してロンドンでは美術部門が貧弱であったことを痛感したマンチェスターが奮起した結果、美術名宝展開催に至ったという。全般的な時代背景について論じた後松村氏は、ギaskellの『北と南』において理想的な Manchester Man として描かれるソーントンの美術志向を指摘し、当時のマンチェスターには産業と美術という一見相容れない要素を融合させる文化的風土が既に存在していたという興味深い結論で講演を締めくくった。

講演中で紹介された Bartolome Esteban Murillo による習作 “Woman Drinking” の解説は、フロアを唖然とさせるほど啓蒙的だった。完成作 “Moses Striking the Rock” と照合させてみると群像の一人である女性が飲んでるのは、酷使される女性労働者から連想するアルコールではなく、《水》！ 歴史文化の幅広い研究と丁寧な作品の読みとが、マンチェスターにおける産業と美術のように、違和感なく溶け合った心に残る講演だった。

大野龍浩副会長による「閉会の辞」では、フロアでは参加者が熱心にメモを取るなど、本協会の知的高さが感じられるとの感想や、若い研究者の一層の参加によって本協会がますます発展することへの期待が述べられ、本例会は午後5時10分に閉会した。参加者は33名であった。

その後、会場近くの「伊賀屋」で自由参加の懇親会が開かれた。講演者の松村昌家先生を囲んで20名ほどが和やかな雰囲気の中、新鮮なシーフードに舌鼓を打ちながら、文学一般やギaskellなどへの思いを語り合った。

（文責 足立万壽子）

第 24 回大会レポート

日 時：平成 24 年 10 月 6 日（土）午後 1 時より

会 場：中京大学 5 号館 2 階 523 教室

総合司会：松岡光治（名古屋大学教授）

開会の辞：日本ギaskell協会会長 多比羅眞理子
（実践女子大学非常勤講師）

シンポジウム：

「19 世紀イギリス小説と都市空間

—— ギaskellから世紀末へ」

司会・講師 梅 正行（中京大学教授）

講師 武井暁子（中京大学教授）

講師 木村晶子（早稲田大学教授）

講師 松本三枝子（愛知県立大学教授）

講師 田中孝信（大阪市立大学教授）

総 会：総合司会 事務局長 諸坂成利（日本大学教授）

講 演：『『クランフォード』を読む J・ヒリス・ミラーを読む』

司会 市川 千恵子（茨城大学准教授）

講師 玉井 暲（武庫川女子大学教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）



（撮影：大野龍浩）

2012 年の第 24 回大会は昨年までの日曜日とは違って土曜日の午後からの開催となりました。午前中の研究発表がなくなったのは残念ですが、その分だけシンポジウムと講演では時間の余裕が生まれ、質疑応答も活発になったような気がします。会場の中京大学は名古屋駅からも近く、地下鉄鶴舞線の八事駅 5 番出口から徒歩 30 秒の所にあります。高級ホテルを思わせるようなセンタービル内の懇親会場も（料理はもちろん）見事なものでした。準備をされた開催校の梅先生と武井先生および学生さん達に、この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。当日の大会参加者は 35 名でした。

多比羅会長の心あたたまる開会の辞に続き、シンポジウム、総会、講演と滞りなく進んで行きましたが、シンポジウムと講演の内容については、それぞれの司会者がまとめられた報告をそのままの形で記載させていただきます。

* * * * *

シンポジウム：「19 世紀イギリス小説と都市空間——ギaskellから世紀末へ」

以下、各氏執筆の要旨に加え司会者の雑感を付す。

「産業革命とマンチェスター：フィクションとノンフィクションの中の都市化」

工業都市マンチェスターの労働者や貧民の実態は 1830-40 年代にかけてフィクションとノンフィクションの題材となった。ケイ＝シャトルワースとチャドウィックは行政側の視点から労働者を啓蒙した場合の経済効率を説き、エンゲルスは労働者の意識向上を呼びかけた。

ギaskellはエンゲルスより控えめだが、都市問題をリアルに描写し、工場主の不見識と労働者の困窮との間の因果関係を明確に書く。だが、困窮した労働者が陥る道徳的墮落を突き詰めて書けない欠点も持つ。ギaskell作品におけるマンチェスターとその住人の描写からギaskellの作家としての長所と短所を見た。（武井暁子）

「エリザベス・ギaskell『北と南』とシャーロット・ブロンテ『ヴィレット』におけるヒロインと都市の表象」

労働者の悲惨な現実が描かれた『メアリ・バートン』のマンチェスターは、『北と南』では架空の都市ミルトンとなり、中産階級のヒロインの新たな生活の場となる。ヒロインが移住する都市でその土地の男性と恋に落ちる点で、『北と南』は、ブロンテのブリュッセル留学体験をもとにした『ヴィレット』と共通している。英国小説において都市は、社会の変化に適応しつつ自我を形成する重要な舞台となるが、両作品においては、特に女性の自己実現と自立の可能性を

探る空間として解釈できる。アウトサイダーとして疎外される空間、エンパワメントの空間、セクシュアリティの空間、喪失の空間という四点から二つの作品の都市の表象を比較考察した。
(木村晶子)

「エリザベス・ギaskellとジョージ・エリオットのロンドン」

19世紀の中産階級の女性達は私的領域の中で生活していたため、女性作家はロンドンを描いていないと言われるが、本当にそうであろうか。ギaskellとエリオットが同時代の都市をどのように感じ、特にロンドンをどのように描いているのか、いないのか、描いていないとすればそれはなぜなのか検証した。特に、ギaskellの『シルヴィアの恋人たち』、『北と南』、『妻たちと娘たち』、そしてエリオットの『ロモラ』、『ダニエル・デロンダ』等、二人の代表的な小説における都市の意味を分析することにより、『北と南』のマーガレット・ヘイルの革新性や、『ダニエル・デロンダ』の斬新さについても言及した。
(松本三枝子)

「世紀末ロンドンのイースト・エンド——慈善活動に駆り立てられる淑女たち」

『北と南』のような19世紀半ばの小説には、慈善活動に勤しむ未婚の若い淑女たちが描き出される。その背景には、現実の女性たちによるスラム街での慈善活動がある。それは世紀末になるにつれて強まり、特にロンドンの「外国」イースト・エンドへと彼女たちは惹きつけられる。彼女たちを駆り立てたのは何だったのだろうか。一義的には憐れみや罪の意識が考えられるが、それだけではないのではないかと。そこに、既成の階級やジェンダー観を脅かす無秩序な欲求がなかったらどうか。それを、現実の、およびフィクション上の女性たちの活動の中を探ってゆき、彼女たちが、同階級のみならず下層階級の女性たちとも交り合いながら、男性を排除した、ホモエロティックなまでの女だけの世界を築き上げてゆく様を明らかにする。彼女たちは、男性のお仕着せではない新たな自分を発見し、社会との関係を再構築する機会を得るのである。
(田中孝信)

「コンラッドのロンドン」

19世紀を通じ小説というジャンルは、しだいに具象から抽象へとその記述のありようを変えていく。ロンドンを目に見えるように書くディケンズから、ロンドンのようでありロンドンではない空間を書くコンラッド。そして都市描写はイタリアの作家イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』に描かれた都市へと近づいていく。そうしたなか、傑作は、作家と場とジャンルの三つが、それぞれに誕生、成長、衰弱、死を経験するなか、三者の成長が、なにかのはずみで重なったときに、生まれてきた。ギaskell、エリオット、ブロンテ、ディケンズのすべてが、その幸福のなかで傑作を書いた。コンラッド、ナイポール、そしてカルヴィーノも。
(梅正行)

研究者であり、また蓄積豊富にしたたかな小説の読み手でもある登壇者による二世紀以上の小説史の俯瞰は、それだけに、学部学生にも入ることのできるイギリス小説史を形成しうる仕上がりとなったと同時に、「冰山の一角」という表現を想起させるほど、いくつもの問題群を水面下に抱え込み、互いを刺激した。フロアからの質問、コメントが問題群をさらに膨らませた。開催準備の苦勞も吹き飛ばし、充実した内容となり、懇親会でもさまざまなコメントをいただいた。この場を借り、関係者に御礼を申し上げたい。

(文責 梅正行)

講演：『クランフォード』を読む J・ヒリス・ミラーを読む」

玉井氏は、J・ヒリス・ミラー著 *Reading Narrative* (1998) 所収の“Apollyon in Cranford”を詳細に解説されながら、『クランフォード』に潜む両義性を指摘された。ミラーは、ニュー・クリティシズムから現象学批評、そして脱構築へと華やかな「変身」を遂げながら、新歴史主義には批判的姿勢を貫く批評家である。徹底したテキストの精読にこだわりをもつ彼が着目するのは、『クランフォード』における反復と不連続性という語りの形態である。そこに、活力を与えつつ、同時に混乱、破壊、狂気をもたらす両義的な Apollyon の存在、あるいは対峙するものの共存をミラーは見出すのである。例えば、古い手紙の読みによって過去の物語が構築されるが、同時にその行為によって過去は解体される。このような両義性は、概して調和や絆に論が集中する本テキストの新たな読みの可能性を提供するものであろう。

(文責 市川千恵子)

* * * * *

講演のあと、大会の掉尾を飾る大野副会長の閉会の辞では、例年どおり、シンポの各パネリストによる発表と玉井氏の講演に関して総括がなされ、副会長独特のコメントが披露されました。特に、玉井氏が講演で細かく分析されたヒリス・ミラーの脱構築による両義性を評価しながらも、そうした作品解釈とは対蹠的な、統計を駆使した客観分析による絶対解釈を自負される副会長の「私は負けません!」という力強い言葉は、非常に印象的でした。

懇親会では、大会運営を手伝ってくださった学生さんたちやブースを出された出版社の方たちも参加され、会員30名ほどが豪華な料理に舌鼓を打ちながら、楽しい二時間を過ごしました。7～8名は二次会として大学近くの雰囲気の良い焼鳥屋さんに行き、そこで名古屋グランパスエイトの有名選手（梅先生の知り合い）に会って記念写真を撮るという僥倖にも恵まれました。このような楽しい一時を過ごせたことは開催校関係者の皆様のおかげであり、心の底から感謝する次第です。（文責 松岡光治）

日本ギヤスケル協会役員会報告

【平成24年度第1回役員会】

日時：平成24年6月2日（土）午後12時半より 会場：日本大学法学部本館2階第1会議室

1. 役員組織と役割分担 1) 組織と任期第12期役員 会長：多比羅眞理子、副会長：大野龍浩、事務局長：諸坂成利、幹事（第12期着任、第13期再任・・・任期は平成26年3月末日まで）江澤美月、大島一彦、木村晶子、小泉朝子、鈴木美津子、田中孝信、長浜麻里子 第13期着任... 足立万壽子、市川千恵子、閑田朋子、関口章子、玉井史絵 2) 役割分担：*『ギヤスケル論集』編集委員長：足立万壽子、論文審査委員：大嶋浩、大野龍浩、木村晶子、鈴木美津子、多比羅眞理子、松村豊子 *第24回大会運営委員：大会会場校：梅正行、武井暁子 *事務局：事務局長：諸坂成利、庶務：小泉朝子、閑田朋子、長浜麻里子 *広報：Newsletter 担当：江澤美月、ホームページの運営：熊倉朗子、各種MLの管理：宮丸裕二 *会計監査（平成22年度分より）玉崎紀子、川上真巳子

2. 『ギヤスケル論集第22号』について事務局長から経過報告がなされた。今回から足立万壽子氏が編集委員長となる。投稿論文3編、書評3編の予定で準備がされている。講演者の原稿については査読を行わないことを確認する。

3. 平成24年度例会、大会内容の確認 1) 例会については、大学の規則上ポスターを入りに貼れなかったことを了承してほしい旨、会場校である日本大学法学部の諸坂氏より断りがあった。2) 第24回大会は、中京大学で開催する（日時：平成24年10月6日（土）午後1時開始）。今回は土曜日の午後から開催するので、開催校からの準備進行状況報告をもとにプログラムの検討を行う。プログラムはシンポジウムと講演のみとし、大会終了後は会場を移して同大学内食堂で懇親会を開催（会費5千円）。

4. 事務局からの報告：① Newsletter について：今回は従来の8ページで編集した。巻頭記事を Jenny Uglov 氏が寄稿してくれたことを江澤美月氏が報告。②各種ML管理担当の宮丸氏より報告：現在利用している中央大学のサーバーのギヤスケル協会への割り当て分が近いうち削られるかもしれないので、「今までと同じ安全性のあるもの」を念頭に現サーバーに代わるものを検討中である。変更の場合は「引っ越しのための簡単な登録手続きが各会員に必要となる」とのこと。その他①大会開催校から：事務の簡素化のため大会懇親会費用を受付ではなく、振込にして事前に支払ってほしいとの要望があり、今回は大会案内に振込用紙を同封することにする。②例会、大会の呼称について：今年度より例会、大会を土曜日に、プログラムも変更されているので、例会を「春季大会」、大会を「秋季大会」にしたらかとの提案があったが、継続審議となる。③英国協会の Journal, Newsletter が年会費を納めているにも関わらず不着のケースがあるので、確認することにする。

【平成24年度第2回役員会】

日時：平成24年10月6日（土）午前11時より 会場：中京大学5号館2階521教室

1. 事務局より：①平成23年度会計報告（会計監査終了）、平成24年度予算報告 ② Newsletter 第25号について江澤美月氏が報告：巻頭記事は英国の新会長 Shirley Foster 氏に、例会レポートは総会司会の足立万壽子氏に、大会レポートは松岡光治氏に依頼予定である。③大会手続、懇親会会場変更（学内での変更）についての確認があった。2. 平成25年度行事予定：①例会：平成25年6月1日（土）午後2時開始、会場候補：実践女子大学香雪記念館2階、プログラム：研究発表3名 ②第25回大会：平成25年10月5日（土）午後1時開始、会場：日本大学法学部、

大会運営委員長：諸坂成利氏 プログラム：シンポジウムのテーマについては募集する。講演は山本史郎氏（東京大学教授）を候補に田中孝信氏に仲介の労を依頼する。役員会は、例会、大会同日の午前中に開催する。3. その他
①『ギaskell論集』の文字校正において、投稿規定にある加筆、訂正は初校のみとする条項、また字数の遵守を投稿者に徹底する。②2015年、没後150年を記念して、『エリザベス・ギaskell没後150年記念論文集』（仮題）を協会活動として行いたいと大野龍浩氏が提案。役員会では全員一致で承認され、午後の総会に提案、承認を得ることとする。出版社は大阪教育図書株式会社を予定、費用の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を申請して助成金を得ることを目標とし、その完成・出版は2015年のギaskellの命日11月12日とする。論文は中編、短編を中心に取り上げる。

【平成24年度第1回臨時役員会】

日時：平成24年10月28日（日）午後1時～午後4時半 会場：私学会館アルカディア（東京 市ヶ谷）
10月に協会のメーリングリスト上で提起された諸問題に関して討議するため臨時役員会を開催した。

【平成24年度第2回臨時役員会】

日時：平成24年12月22日（土）午後2時より 会場：実践女子学園桜会会館（東京 渋谷）
11月末日をもって事務局長を退任した諸坂成利氏の後任として、市川千恵子氏（茨城大学准教授）を選出した。その任期は平成25年1月1日から平成26年3月末日までとする。

（文責 多比羅 真理子）

事務局報告（平成23年度）

平成23年度 日本ギaskell協会会計報告

PDF版につき省略致しました。

◆◆◆◆日本ギaskell協会 第25回例会の御案内◆◆◆◆

日 時：平成25年6月1日（土）午後2時から 会 場：早稲田大学 教育学部
（早稲田キャンパス16号館701教室）

研究発表 司会：足立 万壽子（ノートルダム清心女子大学非常勤講師）

1. 「『メアリ・パートン』における救済について」 矢嶋 瑠莉（日本女子大学大学院博士後期課程）
2. 「サブレ侯爵夫人とギaskell —— サロン文化の変遷」 桐山 恵子（和歌山大学准教授）

講 演 司会：鈴木 美津子（東北大学大学院教授）

『大衆などというものは存在しない』—— レイモンド・ウィリアムズと産業小説

川端 康雄（日本女子大学教授）

閉会后、会場を移して懇親会

◆◆日本ギaskell協会 第25回大会 予告◆◆

日 時：平成25年10月5日（土）午後1時から 会 場：中央大学駿河台記念館
シンポジウム：「Beyond Britain——ギaskellと帝国」

司会・講師 玉井 史絵（同志社大学教授）

講師 田村 真奈美（豊橋技術科学大学准教授）

講師 志渡岡 理恵（実践女子大学専任講師）

講師 加藤 匠（明治大学兼任講師）

講 演：山本史郎（東京大学教授）

◆◆◆ 研究会予定 ◆◆◆

平成25年 5月12日（日）“Libbie Marsh's Three Eras”(1847) 午後2時～4時

7月 “The Sexton's Hero” (1847)

9月 “Hand and Heart” (1849)

11月 “Disappearances” (1851)

平成26年 1月 “Bessy's Troubles at Home” (1852)

3月 “The Old Nurse's Story” (1852)

会場：実践女子学園校友会館（渋谷区東1-1-40 TEL03-3407-7459）

JR 山手線渋谷下車・東口改札口。渋谷警察署傍の首都高速道路に沿って坂を上る。

一つ目の信号を渡り、住友不動産ビルの裏の細い道を入り右側の建物。渋谷駅より徒歩7分。

●●●●● 編集後記 ●●●●●

Newsletter 25号の発行にあたり、寄稿して下さった全ての先生方、特に足立万壽子先生、松岡光治先生に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。巻頭のエッセーは、多比羅真理子先生のご尽力で英国の The Gaskell Society で新たに President に就任された Shirley Foster 先生にお願いすることができました。Forster 先生は、ギaskell研究への関心の高まりとその理由について玉稿をお寄せくださいました。また今回新たに新刊紹介の欄を設けました。最後になりましたが、編集者の任を終えるにあたり、期間中賜りました御支援と御協力に感謝申し上げます。（編集 江澤美月）

発 行：日本ギaskell協会

〒310-8512

茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学人文学部

市川千恵子研究室

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/gaskell/>

e-mail: secretariat@gaskell.jp

（メール・アドレスが変更になりました。）

発行日：2013年5月1日